

『三国志』明帝紀の日付考

180422 三国志研究会（愛知版）佐藤ひろお

1. はじめに

中国の歴史書には、『史記』や『漢書』で採用された 紀伝体という形式がある

紀伝体は、皇帝の年代記（本紀）と、臣下や関連諸国の伝記（列伝）から構成される

本紀は、年月日が判明する限り書かれることが多く、列伝は、概ね年月日を記さない

西晋（3世紀）の陳寿による『三国志』は、魏の皇帝の年代記を本紀とする

『三国志』は、陳寿が先行する歴史書を編纂したもの（王沈『魏書』、魚豢『魏略』）

編纂にあたり、出来事の順序、年月日を正しく表記すべきであるが……

2. 本紀と日付の表記

年と日は、西暦・太陽暦とは別に、十干十二支で表せる

・今年、平成三十年は、戊戌（つちのえいぬ・ぼじゅつ）の年

・本日、四月二十二日は、旧暦三月七日、甲申（きのえさる・こうしん）の日

歴史書の本紀は、年は年号、日は干支で表記

『三国志』巻一 武帝紀より

（建安）二十五（二二〇）年春正月、（王）洛陽に至る。（孫）權 撃ちて（関）羽を斬り、其の

首を伝ふ。庚子、王 洛陽に崩ず。年は六十六なり。

庚子（かのえね・こうし）は、正月二十三日のこと

※ちくま学芸文庫に、「庚子の日（二十三日）」とあって分かるが、誤りもあるため注意

3. 十干十二支とは

水野静夫『干支の漢字学』（あじあブックス、大修館書店、1998年）より

「数」と「序数」は、本質的にその性質を異にする

・「数」は、物事を計算することの対象、必ず数詞を伴う

・「序数」は、第一とか第二、一番目・二番目など、ただ順序を示す

必ずしも数詞を伴わず、主席・次席、正・副など

十干（甲乙丙丁戊己庚辛壬癸）は、殷帝国の世系図に見える（帝辛＝紂）

・王位継承権は、王家男系の分派独立の十家が有する

・十干の成立は、文字発生以前のかかなり古い時期

甲などの十字は、本義的な使用でなく、仮借的使用 →許慎『説文解字』も当を得ず

※『説文解字』は部首別の漢字字典だが、十干は部首でなく別項目を立てる

十二支の成立は未詳（太陰暦の十二ヵ月ですら、有力仮説の一つ）

・動物の配当は、非専門家に普及させるための工夫

・五行説・陰陽説との結合（「きのえね」等）は、事後的なもの；後漢の王充『論衡』物勢篇

午はウマで、子はネズミ、酉はトリ、卯はウサギである。水が火に勝つのなら、ネズミ（水）が

なぜウマ（火）を追いかけないか。金が木に勝つのなら、トリ（金）がなぜウサギ（木）を啄

まないか。……

十干と十二支が組み合わせられるのは、文字が作られた 殷の安陽期以降（～ B.C.11C）

・干支は、「数」でなく「序数」

天体现象の循環回帰、または植物類の再生回転という、生活上の知見から作られた

・十干と十二支を最初から順次 組み合わせると、最小公倍数である六十番目に

最後の符号（循環助数詞）同士である、「癸」＋「亥」が現れる

癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	干支
	壬子 ⁴⁹		庚子 ³⁷		戊子 ²⁵		丙子 ¹³		甲子 ¹	子
癸丑 ⁵⁰		辛丑 ³⁸		己丑 ²⁶		丁丑 ¹⁴		乙丑 ²		丑
	壬寅 ³⁹		庚寅 ²⁷		戊寅 ¹⁵		丙寅 ³		甲寅 ⁵¹	寅
癸卯 ⁴⁰		辛卯 ²⁸		己卯 ¹⁶		丁卯 ⁴		乙卯 ⁵²		卯
	壬辰 ²⁹		庚辰 ¹⁷		戊辰 ⁵		丙辰 ⁵³		甲辰 ⁴¹	辰
癸巳 ³⁰		辛巳 ¹⁸		己巳 ⁶		丁巳 ⁵⁴		乙巳 ⁴²		巳
	壬午 ¹⁹		庚午 ⁷		戊午 ⁵⁵		丙午 ⁴³		甲午 ³¹	午
癸未 ²⁰		辛未 ⁸		己未 ⁵⁶		丁未 ⁴⁴		乙未 ³²		未
	壬申 ⁹		庚申 ⁵⁷		戊申 ⁴⁵		丙申 ³³		甲申 ²¹	申
癸酉 ¹⁰		辛酉 ⁵⁸		己酉 ⁴⁶		丁酉 ³⁴		乙酉 ²²		酉
	壬戌 ⁵⁹		庚戌 ⁴⁷		戊戌 ³⁵		丙戌 ²³		甲戌 ¹¹	戌
癸亥 ⁶⁰		辛亥 ⁴⁸		己亥 ³⁶		丁亥 ²⁴		乙亥 ¹²		亥

図 34 干支表Ⅲ（干支の組み合わせと排列表）
註、表中の数字は、干支の排列順を示す

（木兄寅） 51 甲寅 ^{コウイン}	（木兄辰） 41 甲辰 ^{コウイン}	（木兄午） 31 甲午 ^{コウイン}	（木兄申） 21 甲申 ^{コウイン}	（木兄戌） 11 甲戌 ^{コウイン}	（木兄子） 1 甲子 ^{コウイン}
（木弟卯） 52 乙卯 ^{コウイボ}	（木弟巳） 42 乙巳 ^{コウイシ}	（木弟未） 32 乙未 ^{コウイミ}	（木弟酉） 22 乙酉 ^{コウイフ}	（木弟亥） 12 乙亥 ^{コウイガイ}	（木弟丑） 2 乙丑 ^{コウイチウ}
（火兄辰） 53 丙辰 ^{コウイン}	（火兄午） 43 丙午 ^{コウイコ}	（火兄申） 33 丙申 ^{コウイン}	（火兄戌） 23 丙戌 ^{コウイン}	（火兄子） 13 丙子 ^{コウイシ}	（火兄寅） 3 丙寅 ^{コウイイン}
（火弟巳） 54 丁巳 ^{コウイシ}	（火弟未） 44 丁未 ^{コウイミ}	（火弟酉） 34 丁酉 ^{コウイフ}	（火弟亥） 24 丁亥 ^{コウイガイ}	（火弟丑） 14 丁丑 ^{コウイチウ}	（火弟卯） 4 丁卯 ^{コウイボ}
（土兄午） 55 戊午 ^{コウイコ}	（土兄申） 45 戊申 ^{コウイン}	（土兄戌） 35 戊戌 ^{コウイン}	（土兄子） 25 戊子 ^{コウイシ}	（土兄寅） 15 戊寅 ^{コウイイン}	（土兄辰） 5 戊辰 ^{コウイイン}
（土弟未） 56 己未 ^{コウイミ}	（土弟酉） 46 己酉 ^{コウイフ}	（土弟亥） 36 己亥 ^{コウイガイ}	（土弟丑） 26 己丑 ^{コウイチウ}	（土弟卯） 16 己卯 ^{コウイボ}	（土弟巳） 6 己巳 ^{コウイシ}
（金兄申） 57 庚申 ^{コウイン}	（金兄戌） 47 庚戌 ^{コウイン}	（金兄子） 37 庚子 ^{コウイシ}	（金兄寅） 27 庚寅 ^{コウイイン}	（金兄辰） 17 庚辰 ^{コウイイン}	（金兄午） 7 庚午 ^{コウイコ}
（金弟酉） 58 辛酉 ^{コウイフ}	（金弟亥） 48 辛亥 ^{コウイガイ}	（金弟丑） 38 辛丑 ^{コウイチウ}	（金弟卯） 28 辛卯 ^{コウイボ}	（金弟巳） 18 辛巳 ^{コウイシ}	（金弟未） 8 辛未 ^{コウイミ}
（水兄戌） 59 壬戌 ^{コウイイン}	（水兄子） 49 壬子 ^{コウイシ}	（水兄寅） 39 壬寅 ^{コウイイン}	（水兄辰） 29 壬辰 ^{コウイイン}	（水兄午） 19 壬午 ^{コウイコ}	（水兄申） 9 壬申 ^{コウイン}
（水弟亥） 60 癸亥 ^{コウイガイ}	（水弟丑） 50 癸丑 ^{コウイチウ}	（水弟卯） 40 癸卯 ^{コウイボ}	（水弟巳） 30 癸巳 ^{コウイシ}	（水弟未） 20 癸未 ^{コウイミ}	（水弟酉） 10 癸酉 ^{コウイフ}

図 35 干支表Ⅳ（干支と五行配当図）

4. カレンダー作成

陳垣（一八八〇～一九七一）の『二十史朔閏表』

癸卯 壬寅 辛丑				
魏文帝 黃初二年				
四	三	二	正	
二 庚寅	一 辛卯	二 壬辰	正	
三 庚寅	三 辛卯	三 壬辰	二	
四 己丑	四 乙未	四 乙未	三	
五 己未	五 乙未	五 辛丑	四	
六 戊子	六 甲子	六 庚午	五	
七 戊午	七 甲午	七 庚午	六	
八 丁巳	八 癸巳	八 己巳	七	
九 丁巳	九 癸巳	九 己巳	八	
十 丙戌	十 壬戌	十 戊辰	九	
十一 丙辰	十一 壬戌	十一 戊戌	十	
十二 丙戌	十二 辛卯	十二 丁卯	十一	
一 乙卯	一 辛酉	一 丁酉	十二	
	七 癸亥		閏	

表の上にあるのが年の干支（魏文帝＝曹丕の黄初二年は、西暦二二一年に相当）

右端に正月～十二月を置く；黄初三年は、閏 六月がある

※閏月は、十九年に七回（七ヵ月）挿入される
太陰暦（月の満ち欠けを一ヵ月とする）と、太陽暦（地球の公転を一年とする）を
整合させるための処理で、太陰太陽暦といわれる

各月の朔（ついたち）の日付の干支を示す（左側の二 10 は西暦との対応）

二十九日の月と、三十日の月がある（月の満ち欠けは、29.5 日周期）

エクセルに、六十パターンの干支を無限にコピーし、
『二十史朔閏表』に当てはめると、朔日以外の干支も分かる <http://3guozhi.net/p/cal.html>

5. 『三国志』明帝紀を調査

1) 明帝紀 黄初七（二二六）年

（黄初）七年夏五月、（文）帝（曹丕）病ひ篤し。乃ち（明帝を）立てて皇太子と為す。丁巳、皇帝の位に即き、大赦す。……癸未、母の甄夫人に追諡して文昭皇后と曰ふ。壬辰、皇弟の（曹）薤を立てて陽平王と為す。八月……

エクセルから 五月丁巳は五月十七日と判明； 癸未は、丁巳の二十六日後で、五月に収まらず文帝の発病、明帝の立太子、文帝の崩御、明帝の即位、文帝を葬る、という順序のはず直前の文帝紀に、「六月戊寅、首陽陵に葬る」とあるが、戊寅は、丁巳の二十一日後『二十史朔閏表』によると、六月朔は庚午なので、六月戊寅は、六月九日

癸未は、戊寅（六月九日）の五日後であるから、六月十四日か
癸未は、庚午（六月一日）の十三日後であり、やはり六月十四日
明帝紀は、「癸未」の前に、「六月」の二字が欠けており、本来なら補われるべき

曹薤が陽平王となった壬辰は、庚午の二十二日後で、六月二十三日か
さらに六十日後、八月二十三日も壬辰だが、もしも八月二十三日ならば、
「壬辰」より前に「八月」の字が置かれるべきである → 八月二十三日説は却下

史書は、一年を三ヵ月×四季に分け、季節を最初の記事に付す → 「秋八月」に作るべき

2) 明帝紀 青龍二（二三四）年

（青龍）二年春二月、乙未、太白（金星） 熒惑（火星）を犯す。癸酉、……と詔す。
三月庚寅、山陽公（後漢の献帝） 薨ず。……夏四月、大疫あり。

二月朔は、丙辰であり、乙未は、三十九日後（三月十一日）→二月に収まらず
癸酉は、丙辰の十七日後（二月十八日）で整合

記述順序が正しければ、天体現象があったのは、二月中で、二月十八日より前か？

三月朔は 乙酉； 庚寅はその五日後なので、山陽公の薨去は三月六日

※『後漢書』本紀九 献帝紀に、「魏の青龍二年三月庚寅、山陽公 薨ず」とあり、
三月庚寅（六日）に、山陽公（献帝）が薨去したことは確定か
三月庚寅（六日）の前に、三月乙未（十一日）の記事があるのは、やはり不整合

銭大昕『廿二史考異』卷十五は、『晋書』卷十二 天文志中に、「青龍二年二月己未、太白 熒惑を犯す」とあることに基づき、「乙未」を「己未」に改めるべきとする
己未であれば、二月朔の丙辰の三日後であり、二月四日となる
→ 二月己未（四日）の天体現象、二月癸酉（十八日）の順に並ぶため、整合的に理解可能